民主主義が機能するものならば…

【民主的な社会のカタチ】

大衆社会が民主的に政治家を選ぶ(SHOULD)

政治家の判断は正しいものであると前提して、
その議論をマスコミは広く伝える（MUST)

大衆社会とそれ以外のことどもの有様も、
ただ事実だけについてマスコミは広く伝える(MUST)

政治家が議論に窮してばかりなら？

大衆社会が政治家について不信だけを感じる。
→選択して投票しているのではなく、
「イヤなやつ」を消しこんでいくだけ。

政治家の判断は正しいないのだと、
マスコミはその意見（大衆の不信のタネ)を
広く伝える（商売ですから)

大衆社会とそれ以外のことどもの有様も、
政治不信に遠因があるとのラベル貼りの仕方を、
マスコミは広く伝える
(ユーザの需要に応えているのです)

民主主義には閾値がある？

「ゆたか」な社会で政治家が議論するべきことなど、
実態としてなにもない。
一方で、法律を作らないとカネが回らない。

だが、そうまでしてカネを回さないと餓死がでるような
貧困は存在していないことになっている
日本の「大衆社会」

（大衆社会から見えないところでは、餓死も貧困も搾取も人権崩壊も存在しているし悪質になってもいるのは、公然の秘密・スキャンダルでしかない）

民主主義は遅かれ早かれ、死ぬものだ。

「民主主義の自然死」後に残される課題：

法による支配は有効であり続けなければならない

共有財 Commons の意味を維持可能に
しなければならない
（維持できなければ、
「国家？そんなものが、いつ重要になったんだ？！」
というアイデンティティこそを一般意志にできる)

大文字の自由の汎人類的な実現

民主主義の自然死の有様…

「大衆」は消化され、「個別の群体」たちだけが残る

「政党」はすべて「群体」の病（あるいは風俗）以外の
意味を持てなくなる

「コミュニティ」はそれら同士、
互いを「こわれもの」として扱いあうことが
「マナー」となる
（よそのデキゴトはマナーとして「知るべきではない」）

「個人などない、あるのは群体だ」
（「社会などない、あるのは個人だ」への否定的解）

不死性を獲得した「わたしたち」へ…

「民主主義」の誕生とその自然死

その後にも残る「全体に関する課題」

これらを解けたならば、
「死すべきもの」たち（＝個体）が織り成す
「わたしたち」というメタな「もの」は、
不死性を獲得するだろう
…大量のテクノロジーを
心身と外部環境に充満させることで…

「民主主義は遅かれ早かれ死ぬものだ…
その時がきた？」